

空



2005年

**SORA** 12号

晴夜 (12) — 3

柴田 佐知子

豊年の地を踏み軍鶏の強かりし  
少年に言葉を選ぶ帰り花  
手のつかぬほどに怒れる鬼おこぜ

獸らの飛ぶごと過ぎし冬木立

会へぬ夜を歩けば我も雪をんな

小声もてとどく知らせや花八つ手

塩鮭の塩純白にあらざりし

文断てば終はる恋なり冬珊瑚

母うらら日向ぼこしてもしなくても

# ポインセチア

小林 朱夏

青空を露一粒に収めけり

蠅螂が首を回して我を見る

石菫の花好きな処で咲いてをり

着ぶくれて井戸の底へと声落とす

父を待つ日暮れは早し耳袋

鈴なりの小柿の家の続きをり



悴みて古墳の南京錠を解く

焼芋屋の胸ポケットにハーモニカ

ジャズの音ポインセチアを濃くしたり

女の子ふはふはふはとクリスマス

白き息整へ近づくマリア像

教会の高く灯りし雪景色

涙目となりて果てたる夕焚火

双六や上がれば座より追はれたる

水鳥を火の鳥とする入日かな

# 結 論

苑 実耶

篠栗米の山

能古志賀怡土見むと高きに登りけり

藪に目を凝らせば美男葛かな

結論を先に聞きたし秋扇

きりぎりす潮の匂へる唐津城

萩の花佐用姫岩に潮満ちて

おくんちや龍に躑きゆく人の波



藁屑を残して祭果てにけり

新米に青き匂ひの湯気たちし

母と子に託児所の灯や酔芙蓉

ことここに及びてもなほ穴まどひ

禅寺に相撲部屋あり九州場所

朱の鳥居いくつもくぐる落葉かな

猪垣のまはりに猪の足の跡

霜の降る前に山ほど仕事あり

病床の父は頑固に重ね着す

# 青 空

高倉恵美子

八十は華やぐ齡百日紅

軽き靴選んでをりし芙美子の忌

大祓団扇を持つてゆきにけり

止まらせて蚊を打つことの多くなり

百日草身細るほどの恋もせず

めまとひのタオルの中に入りくる



魂迎へ昔の話したくなり

敗戦日畑に南瓜がごろごろと

洗ひ場に顔差し入れて桃食べる

青空や苦瓜ばかりよく太る

まだ九十歳と言ひて種採る媪かな

秋気澄む食卓に山近づけて

子に配る菓子を並べて芋名月

藁切りで切つてゐるなり大南瓜

いつまでも働く夫や稲の秋

ばつたんこ

遠野 萌

汗の手を握られて汗吹きだせり  
お花畠神の遊んでゐたりけり  
睡蓮のむかう暮れゆく流れあり  
犬来ても猫通りてもばつたんこ  
コスモスの揺れて戦火の絶えぬ星  
紅葉且つ散るはざまより金色堂



黄落や子供ランチに星条旗

花野ゆく迷ひ断ち切るところまで

倉の鍵いまは外され柿紅葉

田の神に束ね置かれて今年藁

囲まれて鱗たたせり秋の蛇

積まれたる祈りの石や鰯雲

湯豆腐や隣りてお国言葉など

夫の腕まはして太る毛糸玉

低き木も大いなる樹も霧氷かな

## 月今宵

服部 早苗

蝉声の満たされてゐる蝉の穴

秋暑し演説の声うらがへる

冷やかや気紛れに買ふ麩まんぢゆう

もろこしの皮の重層一氣に剥く

秋気澄む雷干しの瓜食めば

山の上の空のひといろ釣鐘人參



芒原危ふき石の上に立ち

帰れなかつた遣唐使井真成の墓誌発見による

身に入むや墓誌の末尾の故郷の字

秋の雲唐三彩の馬の背に

夢占やふたすぢわかれゆく花野

望月は中天にあり攪まり見る

月今宵さうわが孫の名もりやうや

院展より仁王門へとくりだせり

釣瓶落しのわれを真中の阿吽像

われから鳴く天にかたむく柄杓星